

# 留学報告書

苅田 裕也

2018 年 6 月

UC Berkeley, Biophysics Graduate Group 2 年目の苅田裕也です。船井情報科学財団からのご支援をいただいて 2016 年度から留学をしています。

## 1 APS March Meeting への参加

今年の 3 月に APS (American Physical Society) の March Meeting に参加して発表を行いました。今回が留学して初の国際会議になりました。この物理学会はアメリカでも最大規模で、参加人数は 11,000 人以上、開催期間は一週間です。分野としても広く、宇宙・素粒子以外の物理分野すべてがごった煮になっています。ただ、意外にもほぼ全ての時間帯で自分の分野と関連あるセッションが開催されており、当日は楽しむことができました。セッションによっては Social Hour が夜に企画されており、他大学の学生や有名教授と会話することができて刺激になりました。その反面、学会中は会場と宿泊施設を往復するのみで、開催地の LA を満喫できなかったのが心残りです。今年、船井財団が LA で夏交流会を企画してくださるということで、そこでリベンジしたいと思います。

自分の発表については、発表時間が 12 分と非常に短く、限られた時間内での話の構成に苦労しました。グループ内で練習してアドバイスを貰い、何とか形にできたかと思います。発表後に興味をもってくれた学生の方がディスカッションしに来てくれたりと、非常に良い経験になりました。現在は発表したプロジェクトを論文にまとめようと co-author として準備に携わっています。なるべく早くに形にできるよう頑張りたいです。

実は今回の国際会議では、発表以外にも大変なことがありました。それは宿泊です。グループ内からボス以外に 7 人が参加するというので、airbnb で全員が一緒に滞在する物件を借りました。ただ、学会の規模が非常に大きいこともあり、良い物件はすぐに予約されてしまいます。結局、安さと会場への近さを優先し、狭い家に滞在することになりました。女性陣 3 人がシングルベッド 2 つをシェアし、僕とポスドクでダブルベッドをシェアし、残りの二人はリビングのマットレスとソファで寝ることになったのです。一泊なら問題ないのですが、一週間の滞在となると着々と体調が蝕まれていきます。最終日にはみんなゲッソリしていて、余分に滞在して観光するはずの予定をキャンセルして早々に帰路につきました。次回の学会では寝床の重要性を提言したいと思います。

## 2 Qualifying Exam

今年の5月末に Qualifying Exam に何とか辛うじて合格しました。この試験は PhD student から PhD candidate になるための非常に重要な試験で、特に defense が存在しない UC Berkeley では PhD 取得に向けての一大関門になっています。形式は学科によって異なりますが、僕の所属する Biophysics Graduate Group の場合、2~3 時間の chalk talk (スライド不使用の板書) で研究計画を committee にプレゼンします。合格すると授業料が劇的に安くなるので、留学生は二年目の終わりまでに通過することが学科から義務付けられています。

2~3 時間の試験と言えど、実際にはたくさんの質問が飛ぶため、事前に用意する発表のは 40 分程度におさめることが求められています。ここで苦勞し、そして失敗したのが、時間配分です。発表に先立って研究計画を書いて提出するのですが、そこでは残りの在学期間での研究計画を大きく 3 つの aim としてまとめます。40 分の発表では 3 年間の研究計画を詳述することは不可能なため、話す内容は計画書から大きく取捨選択しなければなりません。グループ内で発表してアドバイスをもらった感触から、結局 {Intro, Aim1, Aim2, Aim3} をそれぞれ {5 分, 15 分, 10 分, 10 分} 程度の時間配分でまとめましたが、ここで失敗しました。Qualifying exam の committee は thesis committee と違って、分野の遠い教授が参加します。分野外の教授が重視するのは研究手法よりも研究背景です。試験を終えてみて committee が求めていた時間配分は {15 分, 15 分, 5 分, 5 分} くらいであったように感じました。結果、背景の説明が不十分だとして partial pass となり、一週間後に {Intro, Aim1} のみを chalk talk で再発表することになりました。

合格までに波乱万丈あり精神的にもしんどかったですが、前向きに考えると非常に貴重な経験ができました。最後の追加の一週間ではまとめて文献調査に集中する時間を作れましたし、追加の試験も忙しい教授陣がわざわざ時間をとって面倒を見てくれたと思えば幸運だったと思います。Committee の教授陣はみな面倒見がよく、特に主査の教授は何度も面談をセッティングしてアドバイスをくれました。言葉は厳しいことも多かったですが...。So what? と I'm still not convinced は恐怖です。Qual に通過し、やっと研究者の半人前としてのスタート地点に立てたと思うので、より一層気合を入れて研究に取り組んでいきます。

## 3 最後に

今学期で留学二年目が終わり、船井財団からいただいている支援期間も最後となります。船井財団からのご支援がなければ自分が留学して研究することは不可能でした。改めて、感謝申し上げます。少しでも期待に応えられるよう精進を続けます。定期的に報告書で近況をお知らせしますので、今後ともよろしく願います。